

目的 恋をすると外見も変わる、服装にも気を配るようになるとよく言われるように、恋人の有無、恋愛に対する意識や考え方が、その人の被服行動に何らかの影響を及ぼすのではないかと考えられる。そこで、女子大生を対象として恋愛意識が被服行動とどのように関係しているかについて検討した。

方法 京都およびその近郊の女子大生 104名（年齢18～22歳）を対象として1994年11月にアンケート調査を実施した。恋愛意識は、松井他が作成した測定尺度 LETS-2 を用い、異性に対する気持ちや行動について40項目、恋愛に関する意見や異性観について13項目、計53項目を5段階評価してもらった。Leeの恋愛理論に基づいて、53項目を Eros(美への愛)、Mania(狂氣的)、Ludus(遊び)、Pragma(実利的)、Storge(友愛的)、Agape(愛他的)の6尺度に類型化し、尺度得点の高・中・低の3グループに対象者を分割した。被服行動は永野作成の流行性・機能性・適切性・経済性の4尺度、計20項目からなる被服行動尺度を用い、その尺度得点にしたがって同様に対象者を3グループに分割した。そして、これらのグループ間の関連の有無を χ^2 検定によって分析した。

結果 Eros尺度や Mania尺度の得点が高いグループは、低いグループに比べて流行性尺度得点が高く、自分自身を人と区別してより个性的に見せるために流行している服を着るなど流行性重視の被服行動をとっている。また、Ludus尺度や Pragma尺度の得点が高いグループは、低いグループに比べて機能性尺度得点が高く、被服のデザインよりはそれを着たときの動きやすさなどを重視することが明らかになった。